

東洋経済

T O Y O K E I Z A I
O N L I N E

性的マイノリティと共に生きる、新宿の牧師

毎週日曜日は、会議室が教会に早変わり

治部 れんげ ジャーナリスト、編集者

2015年2月4日

よしき

中村吉基さん(=写真)は東京・新宿でキリスト教会の牧師を務める。毎週日曜日には教会で信者たちに向き合う。また、全国からメールでの相談を受けることも多々ある。そのかたわらで週日



はフリーランスの編集者・ライターとして出版社でフルタイムの校正の仕事をし、また在宅で帰宅後の夜間や休日にキリスト教関連の雑誌編集など、いくつかの出版社の仕事も請け負っている。

中村さんが牧師を務めるのは「日本キリスト教団新宿コミュニティー教会」。教会の場

所は、地下鉄新宿3丁目駅から徒歩7分の「ホテルたてしな」会議室だ。毎週日曜の礼拝の時間だけ、会議室が教会に早変わりする。

日本において、クリスチャンは少数派で、人口の0.8%にとどまる。クリスマスやバレンタインデーといった行事こそ消費文化の中に定着しているが、信者の数は意外に少ない。ただ、中村さんの解釈はとても柔軟だ。

「たとえクリスチャンでなくても、ホームレスや社会の片隅に追いやられている人の支援などのために働いている人は、聖書にあるイエスの精神を体現していると思います」

母方にはクリスチャンが多かったが、両親は浄土真宗。自分自身は、お墓などの形式はこだわらないという。

中村さんがクリスチャンになった理由

教会に通い始めたのは小学校2年のとき。ウイルス性の髄膜炎にかかり、生死の境をさまよった。退院した1カ月後に、子ども心にふと思いついて近くにある教会の扉をたたいた。以来、転居先でも教会に通い続けた。高校教師や編集者を経て、2000年に牧師になるための勉強を始めるために神学校に入学した。

ひとつのきっかけは1995年、アメリカへの旅。ニューヨークでエイズ患者が教会から排除されていることを知った。9年後の2004年、新宿コミュニティー教会が生まれた。教会のウェブサイトを作ったのは、中村さんのパートナーであるAさん。ビジネスパーソンでもあるAさんは、中村さんと出会い、その生き方に感銘を受け、クリスチャンとなり、今は一緒に教会を支えている。

なぜ、わざわざ新宿に教会を？ 話し上手で、牧師として既存の大きな教会で働くこともできたはずだが、中村さんの希望は、ごくシンプルだ。「LGBT（性的マイノリティ）やエイズの患者さんたちと一般の人が共に祈る教会を作りたかったのです」。中村さんのパートナーもまた、男性である。交際はもう13年以上になる。

2008年には新宿の教会で結婚式を挙げた。「これから自分が見ていく風景を、相手にも見てほしい」と思ったからだ。式の写真を見せてもらった。会場には、青いカーテンと白い花。清潔感のあるインテリアに、ふたりの笑顔が映えていた。

結婚後にひとつ設けたルールはクリスチャンらしい。「毎朝、一緒に聖書の一節を読むこと」。購読しているクリスチャン向けの雑誌に、その日の一節が書かれている。一緒に住んでいた時期は一緒に読み、別々に住んでいるときもお互い、毎朝同じ一節を読んでいる。後になって、LINEで「今日の聖書のことばは、あなたに向けて語られていたね」と話し合うこともある。



2014年春の「東京レインボープライド 2014」（パレード）に参加する中村さん

パートナーとの暮らし

ふたりは今、都内のマンションの隣り合った棟に住み、お互いの合鍵を持っている。「このくらいの距離感がちょうどいい」と中村さん。前はもっと離れたところに住んでいたが、同世代のタレント・



飯島愛さんが孤独死したのをきっかけに、近くに住むことを考えた。「遠すぎると、いざというとき、駆けつけられませんから」。

Aさんは自分の家族に、中村さんのことをカミングアウトしていないから、同居しないのは、Aさん家族への配慮もある。ふたりとも食事や旅行が趣味で、一緒に出掛けるのも楽しいし、お互いがひとりの時間を持って、後でその経験を共有するのも、また別の楽しみがある。

不安もある。結婚式を機に公正証書を交わしたが、パートナーが突然、大ケガをしたとしても、治療方法などについては互いに意思決定できる立場にないからだ。今の日本には、同性カップルに法律婚と同等の権利を保障する仕組みがない。どれだけ長く連れ添っても、どれだけ深く理解していても、その関係はいざというときには守られない。

それでも「結婚」したいと願う同性カップルの結婚式を、中村さんは、牧師として執り行う。前述したNYの教会だけでなく、日本国内でも、自分の性的指向を教会や牧師に告白したところ「もう教会には来ないでくれ」と言われた人たちが大勢いる。そういう人を受け入れたい、と中村さんは願っている。

「教会の中心的な営みは、日曜の午前中、つまり週の最初に、苦しい人、悲しい人、疲れた人が集まり、牧師は神から預かった言葉を取り次ぎ、聖書の話をするすることで、彼ら、彼女たちを癒して、人々を再び世界に派遣することです。信徒の生活すべてにかかわり、聖書のことばにあるように『共に喜び、共に泣く』。とても大変ですが、とてもうれしい仕事です」

父母の死を経て

私生活もライフワークも仕事も、自分らしいあり方を見つけて、穏やかに暮らしているように見える中村さん。だが、今のように自然に生きられるようになったのは、ごく最近のことだった。物心ついた頃から小学校3～4年生までは、「自分を女性だと思っていました」と振り返る。確かに、当時の写真は可愛らしく、こういう中性的な男の子っているなあと思う。

「オトコオンナ」といじめられたこともあった。小学校の担任からは「女の子とばかり遊んでいて、言葉づかいも男らしくない。私立の男子校に行ったほうがいいのでは」と勧められたこともあった。その後、中学校に入学し詰め襟の制服を着たことで、「男性である自分」を自然に受け入れていくことができた。そして高校生の頃には、自分の性的指向に気づいていた。

父親は高校生のときに亡くなった。ひとりっ子だった中村さんが、牧師になるための勉強を始めた2000年ごろ、母は末期がんだった。「天涯孤独になるかもしれない」と思い始めていたとき、パートナーのAさんと出会った。仕事と勉強で忙しい中村さんに代わって、Aさんが母を看てくれたこともあった。両親に同性愛者であることをはっきり伝えてはいなかったが、病床で母は、Aさんに「この子をよろしくお願いします」と話していたという。

2002年4月に母を亡くしたことで、中村さんは「いろいろなことが吹っ切れました」と言う。親に心配をかけずに済む。ずっと、ひとりっ子だから親より先に死ねないと思ってきたし、自分のことで、親が他人から批判されるおそれも、なくなった。その2年後に、新宿コミュニティー教会を開設した。

教会と社会、どちらが先に変わるか

キリスト教の世界のジェンダー秩序には疑問も感じており、新しいアイデアがいろいろとある。たとえば、信徒は女性が多いのに、教会の役員は男性が圧倒的多数であること。

「牧師も神父も男性ばかりです。これは社会状況の反映だと思いますが、教会と社会、どちらが先に変わるか、と考えています」

自分はあくまでも男性だから、女性の気持ちは想像するしかない。だから、将来「新宿コミュニティー教会にはレズビアン牧師にも協力してほしい」と願っている。

新宿コミュニティー教会には、既成の教会のありように疑問を覚えるクリスチャンが、横浜、埼玉、千葉からも集まってくる。その中のひとりの女性は、当初、牧師が同性愛者だと知らなかったと言っていたが、今では毎年一緒に性的マイノリティのパレードにも参加し、人々に温かい言葉をかけている。「出会いによって人は変わります。そういう様子を見るのは本当に嬉しいことです」

筆者も、カップルの多様なありようが社会的・法的に認知され、保障されるようになることを、願ってやまない。異性愛の法律婚カップルだけが認められる社会は、もうそろそろ、卒業しませんか。